

国語 読解 ファイナル

本書の特色と使い方

○本書は、近年の中学入試問題を研究し、題材・設問ともに良質の入試問題を精選した読解問題集となっています。

○物語・小説文、説明・論説文、随筆文の各ジャンルにおいて、問題のレベルが徐々に上がっていくように配列しています。左記に示したAランクは標準的な問題、Bランクは発展的な問題となっています。

* 物語・小説文	1 ～ 6	Aランク	/	7 ～ 12	Bランク
* 説明・論説文	1 ～ 7	Aランク	/	8 ～ 12	Bランク
* 随筆文	1 ～ 6	Aランク	/	7 ～ 10	Bランク

○目標時間にしたがって演習を行い、別冊の解答・解説を参照して丸付けをしてください。記述問題については、家の人や塾の先生に採点してもらおうとよいでしょう。

物語・小説文 1

目標時間 20分

◇次の小説は、香川県地方の話で、主な方言の意味は直後の（ ）に書いてあります。小学六年の「ぼく」が地区対抗の水泳大会が開かれると聞いたあとに続く場面です。あとの問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点〔。、〕および「」や（ ）なども一字と数えること。

〈獨協中〉

ぼくらはマサコが顔をしかめて汚きたながるくらい体中が汚よごれていたので、このまま海にいった、服を着たまま海につかろうということになった。ほんとは大人の付きそいなしで子どもだけで海にいったはいけないのだけれど、今日のところは①いわる海水浴ではなく、海水入浴だから、まあ、いいだろう、ということになったのだった。

ぼくらは服を着たまま体全体を洗い、ちよつと泳ぎ、水のかけあいをした。②別に汚よごれていないマサコも、海に飛びこんで、見事な背泳ぎで泳ぎ回った。体中からファイトがわいてくるような気がした。この水泳大会も、絶対にあの港のわするんぼ（悪ガキ）たちに負けてはならない。いや、これから毎日特訓するのだから、負けるはずがない。

ぼくらはややなごり惜しかったけれど、海から上がり、意気揚々と帰っていった。マサコの家の前では、デビラ（カレイの干物）のばあちゃんが打ち水をしてほうきで掃はいていた。

「あれーじよお！」

ぼくらの姿を見たばあちゃんは、あきれて叫さけんだ。「あれーじよお」とは、なんだかイタリア語の音楽速度記号みたいだけど、日本語は日本語で、「あれまあ」くらいの意味だが、もっと強い感情を表す*感動詞だ。

「あれーじよお、だれもかれもズグズグの濡ぬれ じゃ。」

③ほんまに、かしこい子ばっかしじゃの」

「これは汗あせじゃ」フミノリがぬけぬけとうそを言った。

「汗やで（などで）あるもんな。海で泳いだんじゃろ。とんでもないことをする」

「深いここにはいかんかったよ」と、ぼくは言った。

「お盆ぼんのこの時期に、服着たまま泳いだりしたら、エライ目に会うんぞな。海をなめたらいかん。それに、この時期には、いろんなモノが戻もどってくるから、よけいなことをせんと、おとなしいにしろもんじゃ」

「うちのばあちゃんはわりと迷信めいしん深いからな」マサコが別れしなに小声で言った。

ばあちゃんの言うことはあながち迷信ばかりではないかもしれない、と思うようなことが、実際に数日後、起こった。

ばあちゃんのところ、幽霊ゆうれいが出たのだ。

数日後、ぼくとマサコ、そして友達のアキテルと、その弟フミノリは、マサコのばあちゃんから幽霊の話聞きます。

「ほんで（それで）、その幽霊はだれやったん？」マサコがきい

た。

「その正体はくくくくく」

ぼくらはぞくぞくしながら④固唾をのんできいている。

「はよ、言い」マサコが命じた。

「それがなくく、お前、なんとなあ」

「それ以上、もったいぶって引きのばすんやったら、きかんで」

「はいはい。それがなあ、お前、なんと、お前のじいちゃんだったんじゃない」

「なーんじゃ」とマサコ。

「なーんじゃとは、なんじゃ」ばあちゃんはちよつとむっとして言った。

「じいちゃんやって、もう九年前に死んでおるんじゃないから、幽霊になったってよかる」

「わし、そのじいちゃん、知らん」と、ぼくは言った。

「わたしも」と、マサコ。

「そら、そうじゃろ。お前ら小さかったから、覚えておらんわ」

「わしも覚えてないわ」フミノリがぼくらに対抗して言う。

「お前はまだ生まれてなかったがな」と、ばあちゃん。

「そのじいちゃん、どなんして死んだん？」と、マサコ。

「海で倒れて、潮がきておぼれて死んだんだよ」ばあちゃんはしんみりした調子で言った。「ゴクドレ（極道者、ろくでなし）

で、女房をさんざん泣かした人じゃったけど、子煩悩で、やがては、孫煩悩でな、マサコをおっぱ（おんぶ）してようこのあたりを歩き回った。ほして、近所の子どもらを集めてよう遊んでやりよった。あれはちよつど今時分、お盆のころじゃ、どう

しても子どもらにおいしいアサリ汁を食べすんじゃない言うて、アサリ掘りにいった。マサコを背負うてな」

「いやじゃなあ」と、マサコ。

「マサコに帽子をかぶせて、自分は手ぬぐいで頬かむりして、せつせとアサリを掘りよった。しかし、あの日はことのほか、暑かった。池の金魚が煮つけになるくらい暑かった。じゃからじいちゃんは日射病になって、気持ち悪くなって、つい、と立ち上がったとき、脳ミソの血管が切れて、砂の上に倒れた。そこに潮が満ってきた。ゴクドレで、外のおなごにおぼれたじいちゃんだったけど、今度はほんまにおぼれて死んだわけじゃ」

「それでわたしはどうなった？」

「これが、不思議なことじゃけど、亡くなったじいちゃんが、両手でお前を捧げ持つみたいにして、水の上に差し上げとったんじゃと。それをボート屋のおっさんが見つけて、お前を助けたんじゃ。わが（自分）は死んでも、お前を差し上げて、助けたんじゃない」

「初めてきくなあ」

「お前の親たちは、⑤そなな（そんな）あほなことが、言うて、信じたかった（信じなかった）からな。じゃからきいたことがないんじゃない。そのうちわたしが話してやる思うとったが、今の今まで⑥忘れとった（忘れてた）んじゃわいなあ」

「そのじいちゃん、どうして迷うて出てきたんじゃろ？」と、マサコ。

「今思うに、わたしが⑦忘れたからかなあ、と」

「じいちゃんが、赤ん坊のわたしを助けたことを？」

「いんや」ばあちゃんは首をふった。「お盆には、じいちゃんが好きなお酒とタイの刺身さしみと薄皮うすかわまんじゅうを供えるのが習慣だったんじゃないけど、今年はそれを忘れてしもとった。それで幽霊になって出てきたんじゃないろ」

⑧怖こわがって損こわした、みたいな話だったが、実際、ばあちゃんがその晩に右記の物を供えたら、幽霊はばあちゃんの前には出てこなくなったそうさ。

フミノリはその後、ぼくらといっしょに特訓した。そして、無事家に帰ったのだが、いったいなにを思ったものか、また一人で海に出かけた。もっと練習して、優勝しようと思ったのだろうか。

そして、波にさらわれて、おぼれた。発見したのは、魚を突つくためにボートで沖に出ていた大学生たちだった。彼らはフミノリをボートに助け上げ、人工呼吸をしながら大急ぎで岸に戻った。そして自家用車で来ていた海水浴客のおじさんが、塚田病院つかだびんに運びこんだ。このことをきいたマサコのばあちゃんは、もちろん「あれーじよお！」と叫んだ。

塚田先生は、ほっといても治る病気なら、塚田先生に診みてもらっても治る、と言われている名医で、そのおかげだか、にもかかわらずだか、フミノリは命をとりとめた。

(芦原あしはらすなお『海辺の博覧会』)

*感動詞…:文法用語で「はい」「おお」とか「こんにちは」など。

□問一 に生き物の名前を入れ、「濡れ 」という決まった言い回しを完成させなさい。

□問二 — ①で、「海水入浴」という言い方をしているのはなぜですか。三十字以内で説明しなさい。

□問三 — ②には、マサコのどういう気持ちが表示されていますか。 「気持ち」につながるように二十五字以内で説明しなさい。

□問四 — ③は、この場合、「皮肉」であると考えられます。ばあちゃんが言いたかったことを、標準語で、「皮肉」を使わずに書くと次のようになります。 の中にふさわしい言葉を次から選び、記号で答えなさい。

「ほんとうに 子ばかりだねえ」

- ア ずるい イ 利発な
ウ ばかな エ 要領のいい
オ 反抗的な

□問五 — ④はどういうようすを表していますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 恐怖きょうふ イ 緊張きんちやう ウ 興奮
エ 納得 オ 苦痛

□問六 ——⑤で言っている「信じなかった」こととは何ですか。それが具体的に書いてある部分を四十字以内で抜き出し、「くこと」につながるように、そのはじめとおわりの五字を答えなさい。

□問七 ——⑥と⑦の「忘れ」たことについて、

(1) ——⑥は何を「忘れとった」のでしょうか。文中の言葉を使って十五字以内で説明しなさい。

(2) ——⑦は何を「忘れ」たのですか。文中の言葉を使って二十五字以内で説明しなさい。

□問八 ——⑧と「ぼく」が思っているのはなぜですか。最も

ふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 幽霊の正体がマサコを助けてくれた人だったから。

イ 幽霊の話聞いたのにお供え物を食べることができなかったから。

ウ 幽霊の正体ははっきりわかるうえに、正体もひょうしぬけするようなものだったから。

エ 幽霊が身近なものだったので、なんだか安心した気持ちになったから。

オ 幽霊の話があまりにもあっけないのに、ばあちゃんの引きのばしが長すぎて疲れたただけだから。

□問九 ——⑨で、ばあちゃんが「あれーじょお！」と叫んだのはなぜですか。ふさわしいものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 言いつけを守らず、海に入ったフミノリがおぼれたから。

イ 幽霊問題が解決しないうちから、またやっかいなことが起こったから。

ウ 名医と評判の塚田先生のところに運びこまれたから。

エ 地元の人ではなく、海水浴客のおじさんに助けられたから。

オ お盆の時期に魚を突きに來た大学生に助けられたから。
カ フミノリがもっと練習して優勝しようと思っていたから。

物語・小説文 2

目標時間 25分

◇次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈獨協埼玉中〉

不思議に、私には涙は湧かなかった。緊張しきっていたのだと思う。汽車の中で、怒ったような眼眸で窓の外をみつめながら、私はなにひとつ考えていたのではなかった。自分に涙がないことにすら、気がつかなかった。私はただ、車内の人びとに目をうつすたび、いま、**A**の父は死んだところなんだ、**B**は、それを①母に知らせに行こうとしているんだ、と意味もなく大声で喚きたい衝動にとらえられた。怒りに似たその衝動ははげしく、②それをこらえることで、やっと私は目が熱くなり、視界がぼやけだすのがわかった。が、私は涙はこぼさなかった。大声もあげなかった。ただ、車内で笑い声が起こるたびに、決死の③形相でそれを睨みつけた。私は、ひどく張りつめた気持で、すこしでもそれを揺り動かされたくなかったのだ。——一人、窓際の席ではしゃいでいる五、六歳の赤い防空頭巾をもった女の子がいた。そのはしゃぎぶりと奇声^{きせい}がたまらなく不快で、私は、目をそらせてはまた睨みつけるように彼女を見て、④我慢に我慢を重ねている気持のまま、その日、品川まで立ちつづけたのを憶えている。

品川駅で山手線に乗り換える地下道を歩いているとき、不意に喉がからからに渴ききっているのに気づいた。私はホームで

水を飲んだ。そして、突然、そうだ、二宮から電話で知らせてもよかったのだ、と思った。もちろん二宮の家に電話はない。しかし、土地の前の持ち主が父母に紹介した町の有力な魚屋には、電話はあっただろう。いくらぼくがその魚屋の人を知らなくても、事情をいえば電話ぐらい借りられたはずだ。いや、あの医者^{いしや}の家^{いへ}にだって電話はあったわけだ。……私は、けんめいに落ち着こう、冷静になろうとつとめながら、じつは自分がまったく⑤その逆だったのだと思った。失敗の意識で顔が赤くなった。……が、私が思わず低く叫んだのは、そのことではなかった。やっど、私は思いついた。そうだ、誰かがこのことに気がつくかもしれない。だとすると、もう五反田の母に電話で知らせてはいないだろうか？

私は、⑥いても立ってもいられない気持になりはじめた。ぼくは、ぼくの口から直接に母に告げたいのだ。直接に、まずぼくが母に知らせたいのだ。ぼくは、母が父の死を知る瞬間にいわせたい。そうして、母といっしょにすべてを考えたい。それだけのために出てきたのだ。

山手線が五反田駅に着くと、私はころがり落ちるように階段を駆け下り、そのまま家に向かって走りだした。*浸潤をおこしかけているという肺になんか、かまっている余裕はなかった。二宮からの電話はなかなかなかからない。が、意外に早く通じてしまうこともあるのだ。私は、⑦目に見えないその敵と競走するみたいに、息をきらせながら走りつづけた。二、三度、大きく喘いで足を止めたが、でも私はどうとう家までを、ほとんど夢中で、全力疾走に近い速度で駆けとおした。

(略)

そのとき廊下から母が顔を出した。

「……どないしたん？」

と、母はいった。異常な私の顔、来訪に、母はふとそれを予期したのだったかもしれない。光の届かない玄関の奥で、その顔はおびえ、蒼ざめたように白く見えた。

「お父様が死んだ」

と、私はいった。

私は、そのとき母が壁に手を当てて身体を支えたのを、いまもありありと目に浮かべることができると。顔色が、みるみる紙のように白くなる、という言葉はただのCではない。いくら陳腐な形容とはいえ、それは事実なのだ。

母は私を見ていた。なにも見ず、なにも考えてはいない目だ、と私は思った。

「……まあ、お上りやす」

と、母はかすれた声でいった。私がゲートルを解き、*編上げの靴を脱いで*式台上ったとき、母はまだ同じ姿勢でじっと私をみつめていた。気の抜けたような声があった。

「昨夜のうちか、今朝はやくらしい。とにかく、ぼくが起きてみたら……」

「もう死んではったん？」

母は私を見据えたままでいった。目を落とすと、廊下を、先に座敷のほうに歩いた。

ちやうど、次姉が休日に来ていた。その次姉が座敷から走ってきて、私の前に立った。

「ほんと？ ほんとなの？ お父様が……」

「今朝死なはったんや。*あてが出てくるとき、気になっておでこさわってみたんやけど、きつとその前、あの軒がせんようになったときに死んではったんやわ。……おでこはまだあったこうかったさかい、……けど、それで安心したあてがアホやったな」

八畳の座敷に坐りながら、母が私の代りに答え、私は無言のまま坐った。

「だって、昨夜はとても元気だったって……」と、立ったまま次姉はいったが、もう、その目が赤く、目蓋がふくらんできていた。

「……ぼくだって意外さ。なにか手が震える、って、まるで神経質になってただろ？ でも昨夜は、もう大丈夫だ、明日、二階から画帖と筆を出してこい、ためしになにか描いてみる、っていつていたんだもの」

いいながら、私は言葉を切った。こんなくだくだしい言葉なんか、いくらいってもはじまらない、こんなことをしゃべりにきたんじゃないのだ。

「じゃ、ほんとなのね？」

いうと、次姉は両手で顔を覆い、泣きはじめた。私は、母は一度も「ほんとか？」と聞き返さなかったな、と気づいた。聞いた。

「電話、あった？ 二宮から」

「へえ？ ——いいええな」母は驚いた顔になって、それで思いついた声で次姉にいった。「そや。お姉さんに知らさな。……」

あんた、お姉さんの行ってる病院の電話、知ってたやろ？ かけて」

次姉は、はげしく首を振った。逃げるように立ち上り、歩こうとしてまた止まった。

「……おかけやす。な、頼みや」と母はくりかえした。顔を覆い、おせび泣きながら次姉は立った。やがて、押し殺した悲鳴に似た泣声、電話のある方角から切れぎれに聞こえてきた。

「……あて、涙もよう出えへん」

しばらく無言で火鉢の灰をかきならしていた母がいった。和服の袂から煙草を出し、炭火をつまんでそれに火を点けた。淡い色の煙が、その頬の苦笑といっしょになり、顔の上にもつわるように動き、流れた。

母は蒼ざめ、首がとても細く見えた。が薄く化粧をした外出着の母、そのときの母が、私には、ひどく美しい女に見えた。何故か、私にはそれが誇らしい気がした。――

(山川方夫『最初の秋』)

* 浸潤…:病菌などが組織内に入り、炎症や腫瘍などが、はつきりした境界ができずに他の組織に移り広がること。

* 編上げの靴…:ひもをホックにかけ、X字に編み上げてはく靴。

* 式台…:玄関先にある低い板敷。

* あて…:会話内で用いられる一人称。「わたし」のこと。

□ 問一 空欄A・Bにあてはまることばの組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

さい。

ア A ぼく B ぼく

イ A ぼく B 私

ウ A 私 B ぼく

エ A 私 B 私

□ 問二 傍線部①「母に知らせに行こうとしているんだ」とあるが、母に知らせたときの「母」の気持ちが行動に表れている一文を抜き出し、その最初の五字を答えなさい。

るが、母に知らせたときの「母」の気持ちが行動に表れている一文を抜き出し、その最初の五字を答えなさい。

□ 問三 傍線部②「それ」の内容が具体的にわかるように説明しなさい。

しなさい。

□ 問四 傍線部③「形相」の「相」と異なる意味の「相」を含むお熟語を次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 人相 イ 面相

ウ 宰相 エ 血相

□ 問五 傍線部④「我慢に我慢を重ねている」とは、何に對してのことか。本文の言葉を用いて説明しなさい。

□問六 傍線部⑤「その逆」の示している内容として最も適当なもの、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 「魚屋の人」に電話を借りられたということ。
- イ 「あの医者の家」に電話があったということ。
- ウ 落ち着きと冷静さを失ってしまったこと。
- エ 失敗を気にしてしまい顔を赤くしていること。

□問七 傍線部⑥「いても立ってもいられない気持」になったのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 自分より先に二宮から電話があることを心配しつつ、自分の口から直接母に告げたいと思っていたから。
- イ よく知らない人に電話を借りるのもためらわれたうえ、まず自分が直接母に知らせたいと思ったから。
- ウ 喉の渇きは我慢できないほどであったが、母が父の死を知る瞬間に自分がいあわせたいと思ったから。
- エ 笑い声が絶えない電車の雰囲気にも飲まれることなく、自分が母といっしょにすべてを考えたいと思ったから。

□問八 傍線部⑦「目に見えないその敵」とは何のことか。それを示す箇所を、本文中から五字以上十字以内で抜き出しなさい。

□問九 空欄Cに当てはまる語として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 誇張
- イ 説明
- ウ 比喩
- エ 文法

□問十 「父」の死に対し、「母」が「次姉」とは異なる受け止め方をしていることがわかる一文を本文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい（句読点を含む）。

□問十一 「父」の死を、「私」と「母」が同じように受け止めていることがわかる箇所を、本文中からそれぞれ一文で抜き出し、その最初の五字を答えなさい（句読点を含む）。

□問十二 本文の内容と一致するものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 「私」は幼い女の子の姿を見て、電車の中では必死になつて涙をこぼさないように努めた。
- イ 「父」の死を聞いても、「母」は決して「私」に対しては、戸惑う姿を見せなかった。
- ウ 「次姉」は「父」の死の様子を最初に「私」から聞き、「お姉さん」（長姉）に電話した。
- エ 「私」が五反田の家に着いたとき、「母」はまだ「父」が死んだことを知らなかった。